

力を 地を 育む



卒業記念: 東京帝國大學農學部農藝化學科 思ひ出 より(1939年)
(農学生命科学図書館 所蔵)

Enrich the soil.

Experimenting on a method to quickly develop straw-fertilizer at one of the farm fields, around 1939.

日

本が曾てアメリカと戦争したことを知らない若者がいると聞きます。「4日間の戦中派」である私にとっても戦争そのものの記憶は無く、平成生まれの若者に見れば、遠い昔のことであっても不思議はありません。この写真は、その太平洋戦争間近の昭和14、15年頃、農学部の一隅で撮られたものです。植物栄養・肥料学研究室を担当していた熊澤喜久雄名誉教授によれば、当時の肥料学講座(春日井新一郎教授)に來た学生達の、圃場における「速成堆肥製造実験」の様子ではなからうかとのことです。「速成堆肥製造法」は「農家における良質の堆肥の製造に貢献し、ひいては第二次世界大戦中の肥料不足に伴う農耕地の地力の維持に資するところ多大であった(農業技術八十年史)」そうです。

熊澤先生のお話を引用しますと、「この頃は自給肥料の増産運動が行われていた時期ですが、水稲生産と畜産とのバランスがとれていなかったため、厩肥なしでの稲わらや麦からの堆肥をなるべく早く造ることが求められ、そのための促成堆肥製造研究が昭和初年より行われていました。要は水を含ませ、石灰で弱アルカリにし、窒素を供給することですが、窒素源としては硫酸が使用され、アンモニアの揮発を防ぎながら発酵をさせるのがコツのようでした。白衣ではなく、作業衣を着て、レーキを持っているのは当時の農夫の野島兼松さんです。」野島さんは、私が植物栄養・肥料学研究室の卒業生であった頃もお元気で、水耕実験の手ほどきを受けた記憶があります。

ガラス温室では、この当時「水耕によるサツマイモの栽培」に成功したということで、荒木貞夫文部大臣(陸軍大将)がその見学のために圃場を訪れたそうです。

いつの世にも変わらないのは、人間の生存を支える食料生産の重要性であり、「環境と食料」を担う農学部の責務ではないでしょうか。

農学国際専攻 新機能植物開発学研究室 西澤直子 教授

にしざわ なおこ

教授